

「現代児童文学」展開期における「アンドロイド・アキコ」の模索 ——古田足日の「近代」「ジェンダー」「子ども」観——

佐藤 宗子
千葉大学・教育学部

A Genetic Study of “Android Akiko”: Furuta Taruhi's Changing Views on Modernity, Gender, Children

SATO Motoko
Faculty of Education, Chiba University, Japan

「現代児童文学」を代表する作家・評論家の一人、古田足日の中級向けSF短編集『月の上のガラスの町』所収の「アンドロイド・アキコ」は、一九六四年に初出誌に発表された時点から、盛光社刊行の初刊、そして加筆訂正された童心社版と、改稿されつつ読み継がれてきた。古田の短編の代表作である同作の改稿過程を丁寧に検証することを通して、そこにみられる「子ども」観、「ジェンダー」観、さらには「恋愛」にまつわる言説に関する「近代」観を追究していった。古田は六〇年代の早い時期からSFに関心を抱き、月面上の町という架空の設定をしたが、そこでの男女の人物造型における当初の自身の設定を、後の加筆訂正で否定してみせる。そこには、「枠」から「枠組み」へと子どもを見る目を問い直すという後の提唱につながる意識を見ることができ、今後は、同時期の古田の批評活動や「現代児童文学」の動向も視野に入れて、より広がりを持ちつつ、この作品を基軸として追究していくことができるだろう。

キーワード……現代児童文学 (contemporary children's literature) ・古田足日 (Furuta Taruhi) ・近代 (modernity) ・ジェンダー (gender) ・子ども観 (children)

一

代表作『宿題ひきうけ株式会社』（理論社、一九六六）刊行とほぼ同時期の一九六七年、古田足日はSF短編集『月の上のガラスの町』を盛光社から刊行した。初出は企業広報誌『奥様手帖』への六回連載（一九六四年一～六月）であったが、そのうちの四話が加筆され、同書に収録された。そのうちの二編が「アンドロイド・アキコ」である。同作は、古田自身も編纂に関与した『現代日本の童話』第一五巻（小峰書店、七〇）の巻頭を飾る表題作にもなっている。ところが、同書が七八年に版元を童心社に変えて刊行されるにあたり、古田は、集中の同作のみ、最後に一節を

書き足すという変更を加えた。その後のフォア文庫版（八四）もそれを踏襲しており、また八〇年代に刊行された「少年少女日本文学館」全三〇巻（講談社）のうち、児童文学の短編収録の巻の作品選定を佐藤さとるとともに任された古田は、第二三巻『現代児童文学傑作選二』（八七）刊行の際に、書き直された同作を収録作に選んでいる。すなわち、古田にとって「アンドロイド・アキコ」は、書き直しの前後を通して、彼自身のSF短編の代表として認識される作品であることがわかる。

『月の上のガラスの町』はその後、「全集 古田足日子どもの本」第六巻（童心社、九三）収録の際、単行本未収録の二話も資料作品として収録され、二〇一〇年には

全六話収録の形態で日本標準から刊行された。

「アンドロイド・アキコ」は、科学者である父親が亡くした娘の代わりにアンドロイドを制作、その後一八歳を迎えたアキコは自らの意思で月の上のガラスの町に赴き、そこで知り合った青年ハルオとの間に「愛」を育もうとするが、やがて強盗から彼を救うために命を落とす、というのがストーリーの中心である。改稿前は、ハルオの眼前で「愛」を確信したアキコが満足して死ぬ場面で終結していたが、改稿後には、その後、アキコの亡骸をはるばる地球の東京まで届けたハルオから話を聞いた父親が、アキコを生き返らせようといったんは考えるものの、制作当初の想定を超えた感情をアキコが持つに至ったことにとふと気づき、それを断念する、という結末となった。なお、童心社版の「あとがき」では、同作に加筆訂正した旨が記されているが、それ以上の詳しい理由は述べられていない。

月面上の町という架空の設定ゆえに、人物造型、物語展開などには、作者の意思がより色濃く反映されやすいのではないかと。本稿では、改稿過程に留意し、上記を追究することを通して、「現代児童文学」展開期における古田の「近代」「ジェンダー」「子ども」観を考えていきたい。

二

(一)

作品検討の前に、本作の変遷過程を確認しておくこととする。

初出は、『奥様手帖』一九六四年一月号からの六回連載である。同誌は味の素株式会社企業広報誌であり、三島万里「総合食品会社の広報誌——味の素株『奥様手帖』と『マイファミリー』を事例に——」（『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』一八、二〇一〇）によれば、一九五一年から同社提供で放送されていた番組「奥様手帖」をもとに作り出された、五六年創刊の雑誌である（終刊は九七年）。B6判横長で、料理を中心にしながらも、六〇年代にかけては佐多稲子、壺井栄などの随筆も掲載されたりしていた。

古田の作品は、〈食後の童話〉と銘打たれ、「月の上のガラスの町」の題名の連作として毎回三ページにわたり掲載された。初回の一月号では、最終ページに編集側からの案内として以下の文章が書かれている。

▽食後の童話：童話作家であり評論家である古田足日さんに、未来の月世界を舞台とした「おとなの童話」をお書きいただきます。さし絵は童画家としてご活躍の久米宏一さんをお願いいたしました。

なお、閲覧できた六二年一月号には同欄の掲載はない。六三年は一年間にわたり、松谷みよ子が同欄に「ちいちゃんモモちゃん」を連載、それらの幾編かは六四年に単行本となる『ちいさいモモちゃん』の元となったことが知られている。

古田作品の連載は「ロボットの恋」「十二才ではいれる大学」「悪魔の失敗」「西からのぼる太陽」「月の花売りむすめ」「巨大な妖精」の順で、このうち一月号掲載作が後に「アンドロイド・アキコ」と改題されることになる。

古田は後に「『奥様手帖』の注文が十七、八歳の女性対象の童話」ということ（七八年刊の童心社版「あとがき」）、「十七、八歳の女性が楽しめる童話を書くように」と言ってきた（二〇一〇年刊の日本標準版「月光のしびれ——あとがき——」）と、繰り返し述べている。しかし、誌面構成を見る限り、また前述の三島論文の記載からも、高校生相当の年齢の女性が読者対象の雑誌とは考えにくい。あるいは原稿依頼の際に、承諾しやすいように編集者が大人との中間的な読者年齢の想定を提示したといったことがあったのかもしれない。

(二)

その後、この連載作品のうち四編をもとにした『月の上のガラスの町』は、盛光社から六七年に、「創作S・Fどうわ」シリーズの一冊として刊行された。

同シリーズの企画については、後に北川幸比古が、同じシリーズの一冊として刊行された佐藤さとの『宇宙からきたかんづめ』がフォア文庫（八二）に収録された際に、「解説ⅡSF童話とはじめ」の中で経緯を説明している。それによれば、同社の「ジュニアSF」シリーズの企画会議の折、より低年齢向けのSFシリーズを提案した北川に、福島正実、長谷川佳哉、古田足日らが賛同し、人選を開始したという。また北川は、フォア文庫版『月の上のガラスの町』（八四）の「解説Ⅱ」月の上のガラスの町」をめぐる想いで、その一環として六六年頃に、古田の本作初出誌を借り読んで読んだことも記している。

単行本化するにあたり、古田は、いくつかの改変を施した。まず、シリーズの想定読者が小学校中学年であることから文体を敬体に変え、各編とも相当程度の書き

足しをした。次に、収録に当たり収録作品を初出誌の一月〜四月号掲載の四編に絞り、順番も変えた。さらに、「ロボットの恋」については、題名も「アンドロイド・アキコ」に変えた。結果として、「西からのぼる太陽」「あくまのしっぱい」「アンドロイド・アキコ」「十二さいではいれる大学」という収録順となった。

初出誌では最初の作品冒頭に記されていた、未来の月の上の町の話であること、「月はむかしより、もっとささげえと、かがやいて」いたこと、さらに付け加えて引力が小さくなることなどが、「はじめに」として記されることになった。

なお、ここで収録された「アンドロイド・アキコ」については、古田も編者の一人となった「現代日本の童話」シリーズ第一五巻『アンドロイド・アキコ』（小峰書店七〇）の巻頭作品として収録されている。同書は「SFの世界の物語」の巻として全一二編を収めるが、古田は「解説」も担当しており、同作の収録は彼自身の意思の表れ——すなわちSF作品としての自負あつてのことと推測できる。

(三)

「アンドロイド・アキコ」に大きな変化が生じるのは、版元が童心社に変わった七八年のことである。童心社版「あとがき」では、初出誌や盛光社版に関するデータや経緯の説明をしたのち、以下のように記される。

四編中、「アンドロイド・アキコ」については、今回さらに加筆訂正したので、盛光社版とはちがっています。

あまりにもそつけない注記だが、この作品のみ、この時点で加筆訂正したというこれについては後に詳しく検討するが、盛光社版で三節構成であったものに、第四節として加筆された。分量としては二割強、増えた勘定になる。また、三節まではほぼ主人公のアキコに即して書かれていたのに対し、加筆部分はアキコの死後の、科学者である父親が中心になっている。

この童心社版は既述のように、八四年にフォア文庫に収録された。

そして、その三年後、古田はまた、彼が関与したアンソロジーに「アンドロイド・アキコ」を収録させる。「少年少女日本文学館」(全三〇巻)の第二三巻『現代日本児童文学傑作選一』(講談社、八七)の作品選定に佐藤さるとともに当たった古田が自身の作品から収録作として選んだのだ。同書「解説」で砂田弘は、収録

順に作品解説をしていくが、古田作品については「科学と人間の問題を、起伏に富むストーリーの中で追求」したものと評価している。巻末に置かれたこととあわせて、改稿された「アンドロイド・アキコ」は、「現代日本の児童文学がづくりだした世界の広さと深さ」を示す好例と捉えられているとみてよからう。

(四)

「全集 古田足日子どもの本」(二三巻+別巻、童心社、九三)刊行の際に、『月の上のガラスの町』は、第六巻に収録された。また、これまで未収録のままだった初出誌掲載の残る二編が、「資料作品」として収録された。これにより、連載時の概容が広く知られるようになった。

これを受けるように、二〇一〇年にはその二編も収録作としての扱いとなり、全六編からなる『月の上のガラスの町』が、「シリーズ本のチカラ」の一冊として、日本標準から刊行されることとなった。初出から半世紀近くを経た六編収録だが、同書「月光の「しびれ」——あとがき——」で晩年の古田は以下のように言う。

：最初の作品として「アンドロイド・アキコ」を書いた。思ったよりよいできで評判もよかった。本にするととき(盛光社 一九六七年)、十七、八歳対象だった表現をもっと下の年齢の子にわかるように書き直した。そして、「アンドロイド・アキコ」はそのあと一九七八年、本が童心社から出るようになったとき、根本的に訂正した。

なぜ、書き直したのか、その理由は結局、古田は語ろうとはしなかった。しかし、「根本的」と言い、「訂正」という以上、初出ないし盛光社版は、当初「よいでき」と本人が感じ、周囲の「評判もよかった」にせよ、作者古田にとって、その形態ではよくないことになったのである。

一体なぜ、改稿をするに至ったのか。それを探るために、どのような改稿がなされたかを先に確認することしよう。(なお、以下の改稿後の作品テキスト検討に際しては、「全集版」を使用した。)

三

本節では、第四節の「加筆訂正」に焦点を当てるため、盛光社版から童心社版への改稿を、作品展開に即して紹介していくことにする。なお、初出誌から盛光社版への改稿に関しては、必要に応じて言及するにとどめる。

盛光社版は、三節構成となっている。第一節では、地球から月行きの宇宙船に乗り込むアキコを見送る科学者である父親の側に即して書かれていく。十八年前に娘を亡くした父親は、亡き娘そっくりのアンドロイド、アキコを制作、しかしその秘密はアキコに内緒にすまま二人暮らしを続けてきた。毎年の身体の作り替えなど父親主導でアキコは成長してきたが、十八歳になったアキコは、「男の子の友だち」「心のそこから愛しあえるような、友だち」が欲しいと言いつ出し、父親は予想外のことに仰天するが、「いきいきとしたほお」「かたちのよいくちびる」のアキコを見て、「このアンドロイドが愛のあいてをもとめる」のも無理からぬことと悟る。やがてアキコは、好きな歌の歌詞にある「すきとおる愛が待つてる」「月のガラスの町」を指して出発するに至る。

第二節に入り、視点はアキコに移る。月の上のガラスの町で散策するアキコは、二人組の強盗に出くわす。柔道も空手も得手のアキコはバッグのひったくりを阻止しようとするも、地球見草のきつい匂いのせいで力が入らない。そんなところをハルオという青年に助けられたアキコは、「テレビ・ドラマとおなじ」と思い、「かならず二人のあいだに愛が生まれる」ことを期待する。

第三節でハルオと付き合いだしたアキコだが、彼女の「愛してる」ということはに彼は、「愛にはもつと、心がかもつてはいるはず」と距離を置き、アキコはショックを受ける。翌日ハルオの勤務先の空気が製造工場見学の中に、五人組の強盗が侵入、たたきおとされた銃を拾って強盗に対峙しようとするアキコの頭の中を、ロボット法の二つの条文が駆け巡り、自身がロボットだったことを彼女は知る。それでも必死に銃のボタンを押したアキコは、電子心臓が破壊されつつも、駆け寄るハルオに告げる——「愛とは心がいたむことなのね」と。彼の涙を顔に受け、アキコは「まんぞく」する。「ハルオの愛をつかんで死んでいく」のだから——。

ここまでが、盛光社版の展開である。第三節のアキコの最期のあたりは、初出誌の段階から、文体の差異を除けばほぼ踏襲されている。

童心社版では、このあとに、第四節が新たに加えられた。舞台は一転、地球である。アキコの遺骸をハルオは、地球の父親の科学者のもとまで届けたのだ。

父親は、いったんは、「青年の愛をつかんで、まんぞく」したアキコの短い生を納得しようとするが、俄然、それを否定する。「愛をつかんで死んでいく」ことに満足してはいけない、せめて「生きて愛をつかめないことを、くやし」らなければと考えた父親は、「おまえを生かさかえらせる」ことを決意して研究室に向かいかけるが、そこで思い直す。自分が設定した状態を越えて、アキコの頭脳は「愛のあいて」をもとめたり、地球見草を好きになったりしていたことに気づいたので。彼は「人間の女としてそだていく可能性」として「人にやさしくする気持ち、花を愛する気持ち、夕やけを美しいとみる気持ち」などはセットしたのだが、その中のさまざまな気持ちが「作用しあっていくなかで」、父親が予想しなかった気持ちが生み出されていったわけである。しかし、「愛をつかみながら死んでいかなければならないことをくやしがる気持ち」は生まれなかった。

やがて父親は理解する——「わたし自身のなかであって、わたし自身が気づいていない、女とはこういうものだ、というかんがえ」によって、アキコを制作していたのだ、と。「愛をつかんで死ぬならそれでもよい、という、ばかげたかんがえ」が自身の中にあつたことが、アキコの不慮の死を招いたことに気づかされた彼は、アキコ蘇らせ計画を断念する。どのようにしても「わたしのなかにある、さまざまの、わたしの気づいていない、かたよったかんがえ」に基づいてしまえば、アキコを不幸せにする悟つたのである。童心社版は、科学者の断念の後、窓外の二十三日の月の描写で締めくくられる。

四

改稿後の作品では、改稿前の結末——愛をつかんだと信じ満足して死ぬアキコ——を、父親が否定していることがわかる。同時に、その状況に満足することを拒むべくアキコを再生させることをも、否定している。親という立場で、娘の判断のあり方を決めてしまうことは、娘の幸福にはつながらないという思考である。ここからは、作者・古田足日自身の考え方の変遷を、窺うことができるのではないだろうか。

初出誌の段階で古田は、彼の記憶に従えば「十七、八歳の若い女性」を対象読者として想定していた。連載第一話で、同年齢に当たる女性を主人公にしたのは、共

感を得やすいとの判断があったためだろう。盛光社版になって細部は膨らませられたが、基本路線は変わらない。愛する相手を求めて地球から月へと旅する女性の姿は、行動的であり、当時の米ソによる宇宙開発のニュースもあいまって、いかにも未来志向の、夢を膨らませやすいものだったはずである。そして、見知らぬ街での危険に遭遇した中での出会いは、男女の出会いをより劇的なものに仕立てる。ただその際、アキコはいわば「恋に恋する」女子として描かれる一方、ハルオは「心のこもった愛」を求める男性である。結局、アキコは身を犠牲にすることによってハルオの愛を得たと信じるが、ハルオの涙ははたして愛ゆえだったかどうかは作中でも明言はされない。アキコの側の思い、彼女自身の満足感が、そこでは重視されていたのである。

そうしたアキコの姿を描き、「よいでき」と作者・古田が思い、読者の評価も高かったとすれば、それが初出六四年、初刊六七年当時の全体的な男女観、恋愛観であったとみなせる。だが、それは改稿刊行の七八年時点では、全く覆されたといつてよい。父・娘関係、ひいては親・子関係、そして男・女関係——それらが、決定的に変化させられた。前二者の、いわば支配・被支配関係は、そもそも成り立っていない。また、後者については、「好きな男の犠牲になり満足する女」という構図自体は、父親の科学者のことばによるその否定が、活かされていると考えられる。

古田はなぜ、この時期に、このような改稿に至ったのだろうか。

五

考えられる理由の一つとして、古田がこの直前、七六年に山口女子大学児童文化学科教授として赴任したことを挙げることができるのではないだろうか。古田はそこで四年間、まさにアキコと同世代の女子学生たちと日常的に接しながら、そして「児童文化」を彼女たちに講義する中から、やがて八〇年代に発表する論考・講演で披瀝する「子ども」観を固めていった。端的には、後の講演集『子どもを見る目を問い直す』（童心社、八七）で明らかかなように、「子ども」を「粹」として考えるのではなく、「粹組み」として捉える、という見方である。

これを「アンドロイド・アキコ」に当てはめて考えてみることはできるだろうか。父親の科学者の第四節でのことばはそのままに、作者・古田の思いの吐露とも考え得る。どれだけ自身のたくさんの理想を既定の条件に組み込んだとしても、不可避

的に想定外の作用・反応が生じてくるのだ、という父親の科学者の得た結論は、作中では悟りのようでもあり、諦念のようでもある。もっとも、そもそも恋愛を求めなければアキコは生きながらえていたはずだが、その場合、今度は、それは果たして彼女自身にとっては幸せたりえたか、という疑問も生じてくる。

ともあれ、父親の定めた「粹」を打ち破りつつ、与えられたロボットの身体の中で、アキコは（父親の）思いがけないことに、精神的に成長していった。その意味において、「粹」をあてはめることの無理・不可として、作中の父親の述懐は、古田の「子ども」観と通底する。

また、満足して死んだアキコで終わらせないという選択により、既存の「ジェンダー」観の打破にもつながっていく可能性がある。実際には、愛をつかんだとして自己満足のうちに死を迎えるアキコの造型に疑問・不満を抱く女性読者もいるはずである。そうした読者は、第四節に至り、悔しがる父親の姿が描かれていることで、自身が抱いた疑問・不満には正当性があると作中で受け止められたと、感じることができる。

親の設定・想定を超えていく子ども、子の自発的・自主的行動を受容する親——改稿過程で見えてくるのは、こうした古田による新たな「子ども」観の確認と、「ジェンダー」観の変化であったのではないだろうか。

その一方で、気になるのは「恋愛」観である。ハルオの「愛にはもっと、心がこもっているはず」という主張の根底には、男女の恋愛に関する、ロマンティック・ラヴの考え方——「近代」的な「恋愛」観——が存するように思われる。その点については、改稿後にしても、「愛をつかみながら死んで」いくことを悔しがるようであったほしかったと父親が考えているところからは、愛は本来、成就されるべきものであるとの見方が窺える。そうであるとするれば、それは右記の「恋愛」観に入るとみなしてよいだろう。その点においては、古田は「近代」の信奉者とは言わぬまでも、同調者であり続けたのかもしれない。

ちなみに、初出時の連載全六話のテーマを改めて見直すと、「ロボットの恋」以外にも、初刊時に外された「月の花売りむすめ」「巨大な妖精」とともに、男女の恋愛がらみの話なのである。前者はムードとことばを電子計算機に組み込んだ恋愛販売会社が成立している中で、「真実の恋」を模索し「人間のことは」を求める男女の姿を描く。後者は対立する地球政府と月政府に対し、恋人たちのデモ行進が戦争

を阻むのだが、それを支えた電子機械が働きかけ得るのは「真実の心を持つ恋人たち」のみだ、と締めくくる。いずれも、電子化が進んだ社会においても人間性を求め、その根幹として男女の恋愛が真実なものとして存する——という考え方が見て取れる。つまり、初出連載時点で古田は、全六話の半分の三話で、恋愛関連のテーマを取り上げていたことになる。おそらくは、テーマが「ロボットの恋」と近すぎることで、初刊の対象年齢が中級であることが、第五・六話を外すことにつながったのだろう。ともあれ、「真実の恋」がしばしば登場する点で、やはり、ロマンティック・ラヴ観念が古田には根強かったと感ぜられるのである。

六

「アンドロイド・アキコ」および連作「月の上のガラスの町」を追究することは、一九六四年から二〇一〇年までの古田の軌跡を確認することにもつながる。とくに、改稿前後を念頭に置くならば、それは、「現代児童文学」展開期を中心にした時期の古田の批評活動とも照らし合わせ、さらには「現代児童文学」全体の動向をも視野に入れて考えることができるのではないか。

たとえば初刊刊行の六七年前後でいえば、古田は前年に『宿題ひきうけ株式会社』（理論社）を刊行、また彼が選考に携わり高く評価して講談社児童文学新人賞を受賞した後藤竜二『天使で大地はいっぱいだ』が刊行されたのは六七年である。古田の後藤作品に対する詳しい批評は、後に同作品の講談社文庫収録に際しての異例ともいえる長い「解説」となり、生前最後の評論集『現代児童文学を問い続けて』（くろしお出版、二〇一一）にも収録された。その時点における子どもの造型に対する考え方を、彼自身の創作『月の上のガラスの町』と対照させてみるることができるだろう。

また、そもそもなぜ月の上かということに関しては、古田自身は日本標準版の「月光の「しびれ」——あとがき——」で、「十七、八歳の娘さんが楽しめるもの（この「楽しめる」は涙も含んでいる）で、ほくも関心のあること・もの」を探していたら「月」にぶつかったと述べている。月光の「しびれ」は、「ことに若い女性はその感覚に鋭敏なのではなからうか」というのである。（これが「粹」としての決めつけなのか、それとも「相対的独自性」としての発言なのかは直ちには決めつけられないところだろう。）

ただし、私としては、「西からのぼる太陽」を読みながら思い浮かべる光景があった。それは、ドリトル先生の姿である。「ドリトル先生物語全集」全十二巻（岩波書店）のうち、第七巻『ドリトル先生と月からの使い』、第八巻『ドリトル先生月へゆく』、第九巻『ドリトル先生月から帰る』の三冊が刊行されたのは一九六二年である。月の引力の問題、地球から行くと巨大化する、など古田作品で基調となっていることはすでに、ドリトル先生が経験済みのことなのだ。本作品には明らかに、「ドリトル先生」シリーズの影が一部みられる——と私自身は考えている。

さらに、古田自身の創作の流れで言えば、おそらくはアキコの造型でなしえなかったことを、その後の登場人物に仮託したのではないか、と思える。行動する女の主人公を「あいちゃん」と呼んで構想を築き上げていた古田を、私も記憶している。結局それは、『へび山のあい子』（童心社、八七）として結実したといえるだろう。

こうして考えていくと、「アンドロイド・アキコ」という作品の存在は、古田足日自身の児童文学・児童文化活動の総体を捉える機軸に据え得る。それと同時に、「現代児童文学」の流れを概観する際の手がかりともなりうるだろう。

「アンドロイド・アキコ」という作品が辿った軌跡を追いつつ、「現代児童文学」展開期における古田の「近代」「ジェンダー」「子ども」観を考えた。さらに、そこからの展望をも述べたところで、本稿を閉じることとしたい。

※本稿は、研究協力者となつて、科学研究費・基盤研究（C）「古田足日と子どもの文化をめぐる総合的考察—蔵書・資料のデータベース化、調査を基に」（研究代表者・仲本美央、20K02638、令和二〜四年度）の研究成果の一部である。

※本稿の骨子は、二〇二〇年十一月一日（土）に開催された日本児童文学学会第五九回研究大会（東京純心大学、ただしオンライン開催）の席上における研究発表「現代児童文学」展開期における「アンドロイド・アキコ」の模索——古田足日の「近代」「ジェンダー」「子ども」観——の中で発表した。